

# 翻訳学におけるイデオロギー研究の 潮流の社会記号論による分析

## Analysis of the Trends of Ideology Researches in Translation Studies Based on Social Semiotics

河原清志

Kiyoshi KAWAHARA

### 1. はじめに

本稿は翻訳に不可避的につきまとう原文テキストと翻訳テキストの齟齬ないしズレ（シフト）に関して、翻訳者のイデオロギーが関与ないし介入していることを分析する翻訳諸学説の潮流を、言語人類学系社会記号論を基に分析しつつ概括することを目的とするものである。

一般的に「イデオロギー」とは、広義では idea（観念）に関わるもので、世界観・信念体系のことである。これは象徴性が高い観念的な慣習的概念のことで、この観念ないし概念には意識化されたものだけでなく、無意識的なものも含まれる。そしてこれは、ある集団ないしコミュニティが共有する「世界観」と同義の抽象的なものと捉えられている。

翻訳研究の文脈で捉えなおすならば、翻訳者という職業集団ないしコミュニティが共有する世界観ないし信念体系である。しかしこのような抽象的な定義は定立可能であるが、具体的に仔細に見ると個別の翻訳者コミュニティごとの世界観ないし信念体系は大きく異なっている。それは大きく分けると、地域、時代、翻訳分野・ジャンルという変数の交点として描け、この交点ないし交差領域ごとに

イデオロギーのあり方は異なるのである。

そこで、本稿ではイデオロギーというものをそもそもどのように考えるべきなのか、そして、これまでの翻訳研究のなかでイデオロギー分析がどのような立場でなされてきたのかについて分析を行い、翻訳学におけるイデオロギー研究の潮流を概括してみたい。このような諸理論のメタ分析を行うために、次節で言語人類学系社会記号論を導入する。

### 2. 言語人類学系社会記号論<sup>註1</sup>

#### 2.1 社会記号論

まずは翻訳行為の本質を見極めるために、翻訳が言語操作・記号操作の一種であることを前提に、米国・プラグマティシズムの科学哲学者・パース（Charles Sanders Peirce: 1839-1914）が提唱した記号論（semiotics）について見てゆく。

パースは記号一般について、対象（object）と記号（sign）との間に大きく、類像性（iconicity）、指標性（indexicality）、象徴性（symbolicity）という記号作用を見出した。これを社会の中での記号作用という観点（社会記号論）から捉え直すと、次のような説明が可能となる。まず、①この類像性は、対象（Object; O）と

記号 (Sign; S) とが同一／同等／類似／相似であることを示す記号作用であり（指標性はSがOの存在を示す作用，象徴性はSとOは恣意的な関係であることを示す作用），この記号作用は解釈項（interpretant；解釈者による解釈）を通して「対象≒記号」であると解釈者が見なす，つまり両者の間に等価性を見出すという記号に対する人の認知作用であると位置づけられる。しかしながら，②この認知作用は同時に，その認知行為の一回的，偶発的で固有な意味作用でもあり，これは当該コンテキスト特有の意味を帯びる語用論的な解釈であって，当該等価構築行為の一次的／二次的社会指標性をも有する（小山，2008，2009，2011）。一次的社会指標性とは，話し手・聞き手などのコミュニケーション出来事参加者たち，言及指示対象，これらの間の社会的距離（親疎），力関係（上下関係），場（コンテキスト）のフォーマリティーなどを示す概念である。また二次的社会指標性とは，これらのレジスターの使用者たち（話者たち）のアイデンティティや力関係上の位置を強く示す（指標する）という特徴を有する（小山，2011，p. 184）。さらに，③これらの類像作用，（一次的／二次的社会）指標作用の背後には，行為者のもつ信念体系や価値観といった象徴的な世界観が言語実践行為に意識的ないし無意識的に反映されている（象徴作用の反映）。

このように①類像作用，②指標作用，③象徴作用という3つの作用が三位一体となって複合的に意味構築を行いつつ，絶えず意味改変をしているのが人の言語実践行為の意味および意味づけのあり方であるといえる。

これを翻訳行為一般に適用するならば，対象Oに対してSという記号を当てる行為はまさしく記号間翻訳であり，その一形態としてOが起点言語テキスト，Sが目標言語テクス

トである場合が狭義の翻訳，すなわち言語間翻訳であると言える（cf. Jakobson, 1959／2004；真島，2005）。そして両者に通底するのは，①「O≒S」（対象と記号が等価な関係）であると見做す行為，すなわち等価構築行為という性質である（河原，2011）。しかしながら同時に，②この「O≒S」は特定のコンテキストで生起する翻訳行為であり，一回性・偶発性・固有性を有するもので，このようなO≒S等価構築行為自体のコンテキストを指標する記号作用をも同時に有する。さらに，③翻訳者の有する価値観・信念体系といった象徴的世界観が翻訳意識となって作用する側面もあり，これらの複合的な意味構築行為が翻訳行為であると言える。以上のことを踏まえて，翻訳の「イデオロギー」概念について検討することとなる。

では，言語人類学においてイデオロギーの解明がどのような社会的意義を持つのかについて，次に検討する。

## 2.2 言語人類学

本稿が依拠する社会記号論の解明に資する言語人類学は，「北米人類学の祖」とよばれるF. ボアスが，反人種主義的・反進化論的言語観，相対的言語観に立って始めた人類学研究の一分野を成すものである。そしてその弟子であるE. サビア，B. ウォーフの言語研究の流れ，また，C. パースやR. ヤコブソンの記号論の流れ，およびD. ハイムズ，J. ガンパーズを経て，これらを集約・統合させたM. シルヴァスティンによって提唱されたコミュニケーション理論として展開したものである（小山，2009）。その理論的特徴は，「今・ここ」で生起する言語使用などの相互行為として為される「出来事」の次元と，「今・ここ」では不可視である「意味・解釈」に関する次元（前述の指標と象徴，語用とメタ語用の次

元), さらには言語使用を支える「言語構造」の次元, この三者をコミュニケーションの全体的枠組みから体系的に解明し理論化するという「メタ理論性」である。特に, 言語相対論としてサピアとウォーフが展開した理論は, 言語構造や語用実践に関する人の「無意識」の領野と, 言語使用者の言語意識の相関と齟齬に関する歴史的理論であり, このような特徴が, 本稿が言語人類学系社会記号論に依拠する最大の理由であり, 理論的骨子となるものである。

具体的には, 以下のテーゼに集約される(Silverstein, 1976; 小山, 2009, pp. 239-242)。

- (1) 言語研究の文化・社会研究性 (分析哲学・言語哲学批判)
- (2) 文化・社会研究の言語研究性 (文化人類学・社会学批判)
- (3) 言語研究と文化・社会研究の相互依存性 (言語人類学の特徴づけ)
- (4) 言語研究と文化・社会研究の結節点としての語用論 (コミュニケーション) 研究
  - (4-1) 社会指標的語用
  - (4-2) 前提的指標性と創出的指標性
- (5) 言語・文化・社会研究の再帰的メタ理論の必要性 (カントの批判哲学テーゼ)
  - (5-1) メタ理論の批判的相対性・普遍性 (ヘルダーのメタ批判テーゼ)
  - (5-2) 記号の機能的多重性
- (6) 北米言語人類学の課題: 旧套の言語文化社会理論のイデオロギーの解明

この6つのテーゼに示されたものが社会記号論系言語人類学の特徴であり狙いである。もう少し具体的に見るために, テーゼ(5)(6)を敷衍すると以下ようになる(小山, 2009, pp. 240-242)。

(5) 言語研究および文化・社会の研究は, それ自体が言語を使用する行為・出来事であって, 文化・社会的な出来事である。したがって言語・文化・社会の研究はいずれも, 再帰的かつ自省的(reflexive)な理論を構築する必要がある。自らの理論言説が社会文化史の大きな全体の流れのなかで, どのような位置を占めるかについて自己分析するメタ理論的枠組を持たねばならない。

このようなメタ理論を導入するには, 以下の3つの要素を持つ必要がある。

(i) 行為・出来事の持つ, (i-a) 言及指示的機能vs. (i-b) 非・言及指示的機能(つまり, 行為者たちのグループ・アイデンティティや権力関係に関わる社会指標的機能)の次元。

(ii) 行為や出来事の持つ, (ii-a) 合目的的機能(行為者の目的意識; 機能<sub>1</sub>) vs. (ii-b) 非・合目的的機能(行為者の意識にほとんど上らないけれども, 現実の社会において作用している機能; 機能<sub>2</sub>)の次元。

(iii) 行為・出来事の持つ, (iii-a) 前提的機能vs. (iii-b) 遂行的(創出的, 帰結的)機能の次元。

(6) 言語や文化・社会が生起する多次元空間のうちで一部の機能だけを対象に理論化を進めてきた近現代の標準的欧米言語・文化・社会理論が持つ意識ないし近代的理性の限界を示し, これらをマルクスやボアスに倣って一種の「イデオロギー」として同定する。そして全体性と(社会的)現実を自らの批判理論の基盤においたマルクス, ボアスに再び倣って, 意識に上りやすい(i-a), (ii-a), (iii-a)だけでなく, 無意識の領野にある(i-b), (ii-b), (iii-b)も包摂して包括的・総合的に分析し, イデオロギーの「虚偽性」(傾向性, 部分性)と語用実践の機能を経験的に解明し理論的に体系化する。これがまさに, 現代北米

言語人類学の主要な課題の一つである。

以上のようなメタ理論的な視座に立ったうえで、次にイデオロギーの概念定義や特徴について見てゆく。

### 3. 広義のイデオロギー論

ここではまず、広義のイデオロギーの記号論的性格から考察する。小山(2008)によると、「象徴記号は、経験的根拠を欠くのであるから、その根拠 (Ground) は非経験的となり、行為や出来事の参加者が暗黙裡に信奉している非経験的な共同幻想<sup>註2</sup> (イデオロギー) を前提条件として作用する。言い換えると、このような象徴記号が、慣習的概念 (イデオロギー) や形式的な意味論的コード (言語構造, ラング) を構成しているのである」としている (p. 497)。これは前述の広義のイデオロギー (慣習的概念) を詳細に述べたものである。社会記号論系言語人類学が依拠、ないし定義する広義のイデオロギーはここに集約されている通りであるが、今一度、イデオロギーについて考察する。

マルクス主義文学批評家であるイーグルトン (1999[1991])<sup>註3</sup> はイデオロギーの定義を16点挙げるなかでこれを多角的に検討し、次の6つのやり方で再定義を行っている。

- (1) イデオロギーとは、社会生活において観念や信念や価値観を生産する全般的な物質的プロセスである
- (2) 社会的に意味ぶかい特定の集団もしくは階級に固有の状況や生活経験に対し、象徴的意味をあたえるような観念や信念 (その真偽のいかにかわらず)
- (3) 社会集団が、それと敵対する社会集団の利益に対抗して、みずからの利益を<促進>し<正当化>すること

(4) 党派的利害関係の促進と正当化を依然強調しつづけることになるが、強調点を支配的な社会権力の活動だけにかぎるものである

(5) イデオロギーによって記号化される観念や信念は、支配的な集団もしくは階級の利益の正当化に役だつのだが、その場合、とりわけ歪曲と捏造の操作が大きくものをいう

(6) 虚偽的あるいは欺瞞的な信念の存在だが、ここではそのような信念を、支配階級の利益からではなく社会全体の物質的構造から生ずるものとみる (イーグルトン, 1999[1991], pp. 76-81)

社会記号論系言語人類学にいう (広義の) イデオロギーは、マルクス主義的ないわゆる虚偽意識ではなく、象徴的信念体系およびそれを源泉とする意識として考えらえる。となると、社会記号論にいう広義のイデオロギーは、イーグルトンの定義のうちの(1)と(2)が当てはまる。(3)から(6)については、特に批判的談話分析 (CDA) の理論群<sup>註4</sup> が問題視するような、社会集団の利害対立性、敵対性、権力性、支配性、歪曲・捏造性、虚偽・欺瞞性などがキーワードになるが、これらはイデオロギーの依拠する社会により象徴的信念体系が言語化されるプロセスにおいて発露する場合、ある程度考慮されてもよい要因かもしれない (翻訳研究におけるイデオロギー研究の一部も、この局面の解明、あるいはこの局面の改良運動を行っている)。それはすなわち、発話者が拠って立つイデオロギーのコンテクスト性によるもので、どのような場に身を置き、どのようなコミュニティに属しているかによって、イデオロギーのあり方も異なり、その言語的表出のあり方も異なってくる。つまりここに象徴 (的信念体系) の言語



化、つまり類像化が社会的な指標性を帯びることを示すものである (indexical iconization of symbol)。

このことを詳述するために話を象徴性に戻すと、象徴性は集団表象、共同体イデオロギーと深く関与しており、「今・ここ」の場で経験的に観察できない事物 (たとえば、ナショナリティー、民族性、男性性・女性性、真理、美、永遠、神性などの彼岸的、他界的、異界的、神話的、抽象概念的、イデオロギー的な世界の事象) を (広義のイデオロギーに関して) 指すと小山は言う (小山, 2008, p. 49)。となると、我々は言説を紡ぎ出す (テキスト化する) 際、自分がアイデンティティを見出す、ないし見出そうとする集団なりコミュニティなりが有している共同体イデオロギーと己を同一視 (identify) する心的傾向性が意識的・無意識的に言表に現れ出る。それは自分がある象徴 (的信念体系、価値観) に対して類像化する作用 (iconization) である。そしてまた、その類像化によるテキスト化は、その象徴体系が表出する社会的コンテクストを指標 (index) している。

また更には、本稿はこの発話者自身の個性にも着目したい。発話者は上記のようにある集団なりコミュニティなりに己を同一化することでアイデンティティの所在を確かめつつ日々を過ごす反面、その集団から (程度の差こそあれ) 一定程度の距離を置くことによって、己の個としてのアイデンティティを形成・維持・発展させるものでもある (ゴフマンが唱えた役割距離の論点<sup>註5</sup>。ゴフマン, 1985[1961], p. 115)。己がアイデンティティを見出す集団は複雑な社会生活を営む上で複数存在する。それに呼応してアイデンティティのあり方も多面的かつ複層的な形で構成される。人は様々な場面で自身の役割を見出し、特定の役割を選択的に引き受け、さらに

それを自分なりの方法で遂行し、己のアイデンティティを絶えず更新するものでもある。となると、ある集団が有するイデオロギーがストレートにその発話者を通じてテキストとして具現化する面もあれば、ある集団表象や共同体イデオロギーとはやや距離を置いて形を変えた、その個人に内属する倫理的・道徳的価値観 (アクシオロジー; axiology) が言表となって現れる面もある (Munday, 2012, pp. 12-20)。

本稿ではこのコミュニティないし集団の有する象徴性であるイデオロギーと、倫理・道徳的な象徴性であるアクシオロジーとが絶妙に織り合わさって紡がれていくのがテキストである、と位置づける。このイデオロギーやアクシオロジーは、一回一回のコミュニケーション出来事ごとにその表出のあり方も多様である。その場その場において、どのイデオロギーやアクシオロジーが前景化するか、何が後景化・隠蔽されるかはその場の偶発性や個性による。そして表出されるイデオロギーやアクシオロジーによってそれらが絶えず改変を繰り返すという無限更新に晒されることからして、これは言葉の意味改変プロセスと平行である。と同時に、コミュニティが一枚岩的なものではなく、その内部にも多様な個性があること、また個人の中にも多様な社会的役割や、人格なり価値観なりが複雑に共存していることを考えると、あるコミュニケーション出来事でどの言葉がどのような意味で表出され、その背後にはどのイデオロギーやどのアクシオロジーが象徴関係として潜んでいるのか、といったことは、極めて個別性、偶発性、暫定性、一回性に富んだ出来事として描けることも了解される。

以上が等価構築の社会指標性と象徴性の素描となるが、これらのことから等価構築の営みが不確定性と多様性を孕みつつ、象徴

性・イデオロギーによって意識的・無意識的に規制を受けることも見えてくる。そこで次節では、社会記号論における象徴性の鍵概念である狭義のイデオロギー、すなわち言語イデオロギーについて論じる。

#### 4. 狭義のイデオロギー論

以上の議論を踏まえつつ、小山 (2011) の唱える狭義のイデオロギー、すなわち言語イデオロギーの解釈を極めて平明に記せば、以下のようなになる (小山, 2011, pp. 4-64)。

- (1) まず、言語イデオロギーとは「ことばについて我々が意識化していること、つまり、ことばについて我々が考えていること」である。
- (2) これを承けると、われわれにはことばに関わる意識があり、そして意識に限界があることから、その死角となる無意識の部分もあり、両者には何らかの関係がある。そこで、どのような部分が意識化されやすいか、また、されにくい、意識化 (イデオロギー化) のプロセスで社会文化はどう変容するか、を論点に議論することになる。
- (3) ボアスーサピアーフの脈絡の言語相対論は、①意識化されない言語構造 (象徴的無意識)、②意識化されない語用実践行為 (指標的無意識)、そして③言語使用者の言語意識 (イデオロギー) の相関と齟齬に関する一般理論として捉えられる。平易に言うと、我々が普段、言語について意識していることと、実際の言語の語彙・文法などの構造には齟齬があり、そして実際に使用している言葉づかいや、言語によって何が為されているかの現実と、それに対する意識とは齟齬がある。

- (4) 意識化 (イデオロギー化) のプロセスで意識からそぎ落とされてしまうのは、語用論的な多様性・変異や言語構造の文法的な面 (形態音素・形態統語範疇などの言語構造の核をなす部分) であり、逆に意識にのほりやすい (合理化したりカテゴリー化したりしやすい) 音素や単語・語彙 (語彙意味論) は意識化の対象となって、それが言語イデオロギー (信奉) として前景化し、現実とのズレが生じて歪みが生まれる。言い換えると、言及指示的機能を果たすユニット、つまり音素あるいは単語や表現などといった「表層的」な、外延的な使用レベルで現れるユニットは意識にのほりやすいため意識化されやすいが、社会指標的機能を果たすユニット<sup>註6</sup>、つまり語用論的な多様性<sup>註7</sup>は意識化されにくい。
- (5) そのような言語についての歪んだ意識が、明示的な言語規範を生んだり、言語を改良しようとしたりする運動へととなっていく。となると、意識化された言語の部分は迅速な史の変容を被り、他方、そうでない部分は緩慢な史の変容しか示さない。

以上が社会記号論による言語イデオロギーの骨子である。これを踏まえて、翻訳者の翻訳イデオロギー、および翻訳研究者の翻訳イデオロギーがいかなるものであるかについて、さらに論じる必要がある。これに関して、本稿によって解明すべき翻訳学諸理論のメタ理論分析に関する要論証テーゼ (問い) は以下のようなになる。

- (1) 翻訳研究ないし翻訳理論によって何が意識化 (イデオロギー化) され、何が意識化されにくい。具体的には、①意識

- 化されない言語構造（象徴的無意識）、②意識化されない語用実践行為（指標的無意識）、そして③言語使用者の言語意識（イデオロギー）の相関と齟齬に関し、翻訳理論ではどのように理論化しているか。
- (2) 翻訳研究者の意識が、翻訳について矮小化した理論を定立したり、翻訳の改良運動（介入主義）へと展開したりしているか。
- (3) 翻訳不可能性・相対性・多様性の要因として翻訳理論は何を意識化しているか。
- (4) 以上から、翻訳理論のイデオロギーはどのようなものか。そして翻訳研究者のイデオロギーと社会文化史的コンテクストとはどんな関係があるか。
- (5) 本質的にコンテクスト負荷性とイデオロギー負荷性のある「翻訳等価性」を鍵概念にして、翻訳学の全体をどのように（再）構築していくべきか。

以上が言語人類学系社会記号論による言語イデオロギーからの類推による、翻訳イデオロギーに関する問いである。そして、一般には通常の言語使用と翻訳は、単一言語内での言語使用か二言語間の変換行為か、という違いに収束させて両者の違いが論じられていたが、記号過程の全体像を射程に入れて本質論を展開するならば、言語使用行為一般と翻訳行為とのメタ語用フレームの異同が明らかになり、翻訳理論の全体像を新たに提示できる可能性が開ける。

そして翻訳研究を、このイデオロギーという概念を媒介にしつつ言語研究と社会文化研究との交叉領域において行うという本稿のメタ理論分析の趣旨からは、このイデオロギーの社会文化的機能について今一度考えておく必要がある。マルクス主義文学批評という視点が帯有するある種のイデオロギーが不可避

的に備わっていることを認めつつも、イーグルトンによるイデオロギーの基本的機能に関する考察をここで検討し、翻訳諸理論が負っているイデオロギー分析の道標にしたい。イーグルトンはイデオロギーの機能として、①統一化 (unifying)、②行動志向 (action-oriented)、③合理化 (rationalizing)、④正当化 (legitimizing)、⑤普遍化 (universalizing)、⑥自然化 (naturalizing) を挙げている（イーグルトン、1999[1991]、pp. 107-135）。具体的に言うといデオロギーは、①それを信奉する集団や階級をひとつにまとめ、集団や階級に統一的な（但し内的には差異を孕んだ）アイデンティティを与え、統一をもたらす力を付与する。②思弁的な理論体系ではなく人を行動へと促す信念の集合であり、③真の動機が認識されていない態度や観念・感情などについて、論理的に首尾一貫しているか、倫理的に容認できる説明を主体が示そうとし、批判の対象になりそうな社会的行為に対してもっともらしい説明や理由を提示しようとする。また④本来ならば不当なものを真っ当なものに見せかけようとする欲求めいたものを暗示し、さらには⑤価値や利害が本当はある特定の場所や時代に固有のものにすぎないのに、それらを人類全体の永遠の価値や利害に見せかけ、終局的には⑥その信念を自然なもの、自明なものに見せかけ、それを社会の常識と一致させ、それ以外の信念を想像できないようにさせる。このように機能するのがイデオロギーであるとイーグルトンは論じている。

これを承けて、理論の構築・提示という社会行為が持つ機能<sub>1</sub>（合目的的機能）と機能<sub>2</sub>（非合目的的機能）に、イデオロギー（化）のプロセスとして上記①～⑥がどのように関与するのかについて緻密に検証することは、諸理論のもつイデオロギーの解明に有益であると思われる。

では次に、翻訳学において翻訳に関するイデオロギーを研究してきた諸学説を検討し、分類してみたい。

## 5. 翻訳学におけるイデオロギー研究の潮流と類型

本稿のこれまでの趣旨を考えると、すべての翻訳研究の諸学説はその主張者・主導者・唱道者の立場性 (positionality)、イデオロギー、アクシオロギー、アイデンティティを反映させていると言える。そしてこれが即ち、学説の社会指標性 (機能<sub>1</sub>および機能<sub>2</sub>、特に後者)でもある。この点につき、M. ティモツコが翻訳者の立場性について次のように述べていることは注目に値する。

支配的な権力の中核にとっての翻訳者の問題は、翻訳者は複数の文化の狭間にいるとか複数の文化への忠誠の狭間にいるということではなく、相反する複数のイデオロギーや変革の綱領、支配的な権力の監視の及ばない転覆の計略などにあまりに深く関与しすぎることである。翻訳のイデオロギーは翻訳者の立ち位置の結果であって、この立ち位置は狭間のスペースなのではない。(Tymoczko, 2003)<sup>註8,9</sup>

要するにこれは、翻訳者はH. バーバが説くように、起点社会と目標社会の間に挟まれた第三の空間を彷徨う移民としてのメタファーが当てはまる存在というのではなく(バーバ, 2005[1994]), 自らの立ち位置の結果、自らのイデオロギーを表出する存在であることをストレートに認める主張である。このことは翻訳研究者にも当てはまる状況であると捉えられる。すなわち、研究者は翻訳者と一般読者との狭間、あるいは起点文化と目

標文化との狭間にいるとか、両者に対し中立性を維持し、その中立性に対しても忠誠であるという両者の完全な狭間にいるというのではなく、自らの立場性とイデオロギーでもって翻訳行為や翻訳テキスト、翻訳者自身を研究対象にして観察、記述、説明、理論化、体系化を行うことを任務としているのである。無色透明な第三の空間に存在するのではなく、具体的コンテキスト内にいる翻訳者、そこに存在する翻訳テキストと対峙するなかで、それに反目したり抵抗したり賛同したり称賛したりしながら、自ら正当であると信ずる方法論によってそれらを対象化していくのである。この学問的営為の社会指標性について自己回帰的な省察を怠ったならば、自己批判原理不在の稚拙な理論構築となる、というのが本稿の一つの帰結である。以上の原理的考察を基に、翻訳をめぐるイデオロギーやパワー関係の諸学説を検討する。

翻訳研究者であるブラウンリーは、翻訳研究のスタンスとして「記述的アプローチ (descriptive approach) vs. 関与的アプローチ (committed approach)」という二項対立的な捉え方をしている。これは恐らくG. トゥーリーが展開する記述的翻訳研究 (DTS) への批判論を横目で見つ、様々なイデオロギー的介入を積極的に行う立場の翻訳研究を目にして「関与的アプローチ」と命名したのだろうと推察される。そして、これを同時に規定的 (prescriptive) という用語によっても特徴づけをしている(ブラウンリー, 2013 [2009], p. 49)。

しかし、本稿ではマンデイが翻訳者は介入的存在であると言っている趣旨を承け (Munday, 2007, p. xv), かつ、「関与 (commitment / involvement)」という言葉の響きでは説明しきれない、かなり積極的、活動的な学説まで射程に入れて論じる必要がある



こと、また、翻訳教育的な示唆をもこの関与的アプローチに含めるのは、背後にあるイデオロギーの違いが大きすぎるため、それは「模範的 (prescriptive)」という概念で扱うこ

ととし、この政治性を帯びた学説群とは切り離して考えたいため、「関与的・介入的アプローチ (committed / intervenient approach)」と称することとする。

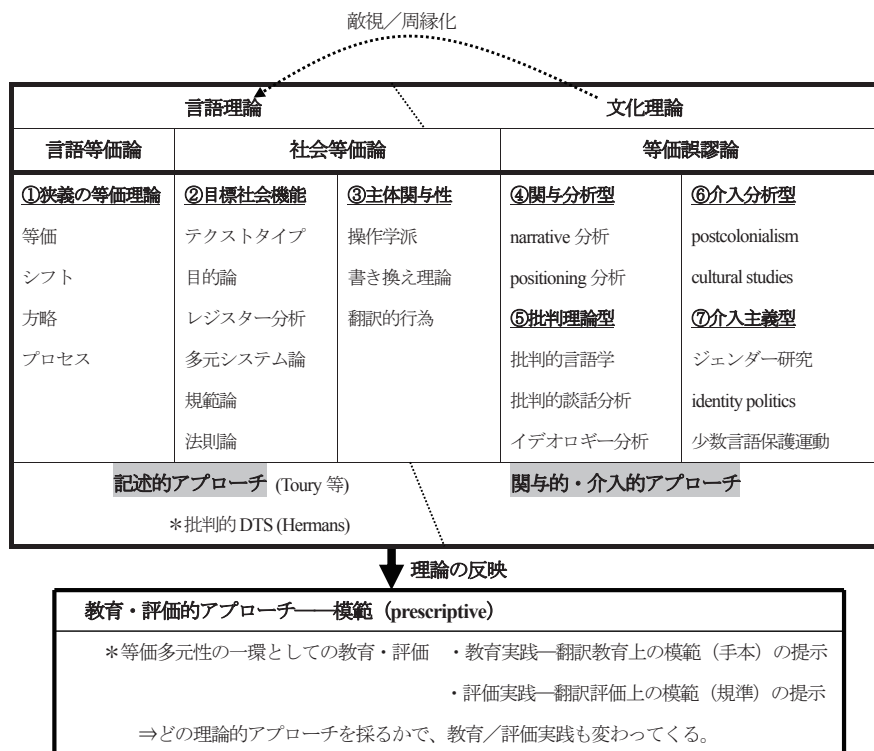


図1：翻訳研究のアプローチの布置

上記のような本稿の趣旨に鑑み、次のような分類が可能だと考えられる (図1)。まず非関与型・介入型の類型を説明すると、図1の①は一般的には狭義の等価理論だとされている理論群である。②は目標社会における翻訳の社会的機能を重視する学説群、③はその中でも翻訳者 (及び翻訳に関わる諸関係者) の主体関与性に照準を合わせる学説群である。

では、次に翻訳に関するイデオロギーについて積極的に分析対象としている諸学説を分類しながら検討してゆく。

### (1) 関与的・介入的アプローチの類型

関与的・介入的アプローチは、言語間・文化間またはその内部に不公正な権力格差があるという認識に立って政治的動機・大義で翻訳を研究するアプローチで、(社会改良主義的な意味での) 政治的大義を有しない社会等価論 (図1の②③) とは本質的に異なると言える。この関与的・介入的アプローチは、④関与分析型、⑤批判理論型、⑥介入分析型、⑦介入主義型、に分類できる (但し、これらはいくまでも非離散的なものではある)。④には、M. ベーカーやM. ティモツコといった、批判的 (critical) 言語学 (CL) や批判的談

話分析（CDA）の手法に与しないタイプもあるため、これを関与分析型と本稿では称することとし、CLやCDAの手法を翻訳研究に応用するタイプを⑤批判理論型と呼ぶこととする。⑥⑦は翻訳者が積極的に政治的介入行為を行っていることを前提とした議論で、⑥はそれを分析するタイプ、⑦は翻訳者に介入するよう呼びかける社会改良運動的なタイプである。但し、以上の分類は、諸学説の特性を見極めるためにあえて手続き的に分類していることを断っておく。

### ・介入的アプローチ

特定の政治的動機・大義を有した翻訳研究者の場合、特定のイデオロギーで翻訳を分析し、介入的に評価・教育に従事しつつ当該の政治的大義を奨励することもある。⑦介入主義型だと、活動家・介入者としてある種のアイデンティティ・ポリティックス（IP）を展開する動きでもある。例を挙げると、カナダのフェミニズム翻訳研究者などである<sup>註10</sup>。これは例えば、「特定の文学的な価値観を推進することにより、そして連携を強化することにより、女性は翻訳を、新たな文化的ダイナミクスの創造に参画する強力な道具として使うことができる」と主張する学説である（Simon, 2002 in Tymoczko & Gentzler, 2002）。

⑥介入分析型は、ポストコロニアル翻訳研究のT. ニランジャナ、米国の主流文化の自民族・自文化中心主義を断罪するL. ヴェヌティなどがその称揚者である。具体的な社会運動を起こしているわけではないが、翻訳行為の積極的介入性を分析する学説である（但し、ヴェヌティは支配的価値観に対する抵抗のための＜行動への呼びかけ＞を戦略的に行っていることは付記すべき事項である）。

イーグルトンのイデオロギー化の6段階プロセスに当てはめてみると、⑦介入主義型の

学説は既存のディスコースの機能<sub>1</sub>を暴きつつ、その社会的歪曲を是正するという自らの機能<sub>1</sub>を果たすべく、自らが是とする方向へと統一化、行動志向、合理化、正当化、普遍化、自然化を呼びかけるものである。そのことによって社会の改良を促進するのがこれらの学説の狙いである。

⑥介入分析型は、既存の翻訳産出の結果物であるディスコースがどのように統一化、行動志向、合理化、正当化、普遍化、自然化を果たしているかについての諸機能<sub>1</sub>を分析しているものと位置づけられる。そして、具体的な社会運動を起こしているわけではないが、暗に（つまり機能<sub>2</sub>の次元で）既存の翻訳ディスコースのあり方を是正するように訴えているものである。

### ・関与分析型アプローチ

他方、特定の政治的介入実践は行わないながらも、翻訳実践行為への主体の関与性について分析するアプローチがある。翻訳自体を主体性やイデオロギーが関与する社会文化活動と捉え、翻訳行為が内包する立場性、イデオロギー性を詳らかにしてその旨を強調する④のアプローチである。ベーカー（Baker, 2005, 2006）やティモツコ（Tymoczko, 1999, 2000, 2003）がこの立場を採る研究者である。ティモツコは、「翻訳とは、単なる忠実な再現行為ではなく、むしろ選択、組み合わせ、構造化、模造という意図的で意識的な行為である。そして時として、改ざん、情報の拒絶、偽造、暗号の創造ですらある。このように、翻訳者は想像力豊かな作家や政治家と同じように、知を創造し文化を形成するという権力行為に参画している」と主張している（Tymoczko & Gentzler, 2002, p. xxi）。中立的な仲介者としての翻訳者、特定の文化的状況を超越した第三の空間で行われるのが翻訳

行為であることに反対し、翻訳行為は特定の文化的・政治的性格が埋め込まれていることを強調するのである（ブラウンリー, 2013[2009], p. 51）。

この一環としてベーカーが主張しているのが、翻訳におけるナラティヴの作用である（Baker, 2006）。これはコミュニケーション学のW. フィッシャー（Fisher, 1987）の研究の応用である。フィッシャーはある行為が倫理実践として見なされるか否か、ある行為が正当な理由で行われたか否かの決定は、抽象的合理性に基づくのではなく、人が自らの生きる世界について抱くようになったナラティヴに基づいていると主張した（イングレリ, 2013[2009], p. 68; Baker, 2011第8章「倫理と道徳」も併せて参照）。「ナレーションとはあらゆるコミュニケーションを解釈し評価するためのコンテキストで、これは、それを創った人の意図的な選択によってできたディスコースの一形態ではなく、我々がはじめに理解する際の知識の型のことである」という（Fisher, 1987, p. 193 in Baker, 2006, p. 9）。このように倫理性と個人の主観的ナラティヴないし合理性のあり方が密接不可分であることより、翻訳者倫理の解明のためにナラティヴ分析を行う手法をベーカーは採用していると言えるだろう。これは、包括的にある種の方向性をもって取り組んだならば、翻訳が社会的、政治的変革を促す力として役割を演じる可能性を高めることもできるとする（イングレリ, 2013[2009], p. 69）。しかし、これを極端に推し進めたならば、⑥や⑦のアプローチに限りなく接近することとなる。

#### ・批判理論型アプローチ

この⑤のタイプは、テキストを知識とイデオロギーの動的な表現と構成に常に関与しているディスコースの例であると捉える批判的

言語学（Critical Linguistics）と批判的談話分析（Critical Discourse Analysis）の領域を翻訳研究に応用したものである。これはディスコースが社会的に条件づけられつつも同時に社会を形成すると考える立場で、分析とその対象との関係に批判的な立場で臨むこと、コンテキストの中の言語的相互作用の実例を分析することが必要であることを特徴としている（サルダニャ, 2013[2009], pp. 119-120）。CLはファウラー（R. Fowler）、CDAはフェアクラフ（N. Fairclough）、ファン・ダイク（T. A. van Dijk）、ウォダック（R. Wodak）などが代表的研究者である。これを翻訳研究に応用すると、翻訳は起点テキストと目標テキストの世界観を仲介するプロセスであり、参与者間の権力の差異に必然的に影響を受けるプロセスであるとしたうえで、翻訳者の決断や選択の背後にある動機を、緻密な言語分析の手法によって探るアプローチを採ることになる（サルダニャ, 2013[2009], p. 120）。

#### (2) 翻訳イデオロギー

以上のように見てくると、翻訳行為がイデオロギーと相当深く関わっていることを翻訳学の研究者がこれまで詳らかにしてきたことがわかる（と同時に、研究者個人のアクシオロギーも露呈している）。Hatim & Mason (1997) は翻訳におけるイデオロギーの介入を論じた先駆けであるし、Pérez (2003), Cunico & Munday (2007), Elliot & Boer (2012), Munday (2012) などは翻訳におけるイデオロギー介入性について正面から取り上げている。独自の路線と言え、書き換え理論を提唱したA. ルフェーヴルは、イデオロギーを「特定の時代の特定の社会において受容可能だとされる考え方と態度から成る関係網であり、読者と翻訳者はそれを通してテキストに近づく」と説明し（Lefevere, 1998, p.

48 in フォーセット・マンデイ, 2013[2009], p. 108), 翻訳は支援要素 (イデオロギー, 経済, ステータス) に大きく左右されると主張している。またルフェーヴルは, 詩論・イデオロギー・翻訳間の相互作用に関し, イデオロギーや詩論が言語的要素に優位する点を主張している (Lefevere, 1992, p. 39)。

翻訳をめぐるあらゆる選択 (訳語決定から, 訳出ストラテジーの選択, パラテキストの装置の使用の決定から, 出版プロセス, そしてどの作品を翻訳するか決定まで) には, イデオロギーが不可避かつ本質的に介入する。したがって翻訳には, 起点テキスト・言語・文化の目標社会における歪曲・操作・リライトが多分に内包されているのである。また, 「こうした操作は, 翻訳者の意識的な『イデオロギー』を示すものでありうるし, 出版社, 編集者, 公的機関・政府関係等圧力といった翻訳環境の『イデオロギー的』要素により生じる場合もある」(マンデイ, 2009[2008], p. 220)。

以上で見てきたのは, 翻訳理論家・研究者が翻訳研究を通して析出した, 翻訳実践行為が持つイデオロギー, 翻訳実務家が有するイデオロギーである。しかしながら, 本稿が目指すメタ理論分析では, 以上で見てきた翻訳イデオロギーを分析する翻訳理論家・研究者が持つ様々なイデオロギーを分析することであり, このような (二階レベルでの) メタ分析を通して, (一階レベルの) 翻訳研究や翻訳実践行為の分析に内在する死角を詳らかにする。それが本稿の主意である。

## 6. 翻訳学のイデオロギー研究のイデオロギー分析

とは言うものの, 紙幅の関係上, 本稿は多岐にわたる翻訳諸学説を網羅的に検討することができないため, 以上で分類し検討した翻

訳イデオロギーを扱った諸学説 (一階レベル) のみで (二階レベルのメタ分析の) 結論を出すことはできないが, 前述した翻訳学諸理論のメタ理論分析に関する要論証テーゼ (問い) についての結論を一部示しておきたい。本項で分析した諸学説から導出される翻訳イデオロギーについてのテーゼの結論は, 下記の(2)で展開する。(以下の(1)および(3)~(5)は河原 (2015) によって論じているものであるが, (2)に付随する重要な論点であるので, 本稿でも取り上げることとする。)

### (1) 翻訳理論の対象とイデオロギー分析

これまでの翻訳研究によって意識化 (イデオロギー化) されているのは, 翻訳行為のなかで, ①<何が言われているのか>, すなわち単語・語彙といった語彙意味論における内包的意味・外延の意味・感情的意味などの辞書的意味や百科事典の意味, 文法の旧来型の対照言語学的な項目, テキスト言語学での旧来型のテキスト機能論, そして語用論としては言語行為論や認知的側面に集中しがちである (cf. Koyama, 1997)。他方, 意識化されにくいのは, 言語構造の核になる部分 (形態音素, 形態統語範疇) と実際の翻訳語用行為との関係や, スキーマ化された意味とそのメカニズム, <何が為されているのか>に関わる社会指標の意味, 特に創出的機能や語用論的な多様性である。また②翻訳という (語用実践) 行為の目的に関しては, 諸理論が有する前提的・合目的機能 (要するに, 理論の狙い・達成目標) は意識化されやすく (スコパス理論, 多元システム論, 翻訳規範論, 機能主義的システム理論など), 反面, そのような合目的性を目指すことにより発生する創出的・非合目的機能ないし効果は意識化されにくい。

そして, ①翻訳現象のなかの意識化されな



い構造的側面（象徴的無意識）、②翻訳行為のなかの意識化されない語用実践行為（指標的無意識）、そして③翻訳実践者の翻訳意識（翻訳イデオロギー）の相関と齟齬に関し、翻訳理論として理論化はされていない。（詳しくは、河原、2015を参照。）

## (2) 翻訳理論の関与性・介入性

翻訳研究者の歪んだ意識が、どのように翻訳について矮小化した理論を定立したり、翻訳の改良運動（介入主義）へと展開したりしているかについては、本稿で検討した介入性分析型・関与性分析型・（批判理論系）イデオロギー分析型の諸理論では、翻訳の持つ非合目的性・機能<sub>2</sub>を意識化させる運動をすることで、翻訳者や一般の人たちにそれを合目的性・機能<sub>1</sub>として認識させ、語用実践の歪みを是正する介入主義の立場を採るものがある。これは典型的にはフェミニズム翻訳理論に見られる男性優位社会に対する是正を要求する介入型の学説である。

## (3) 翻訳の多様性

翻訳不可能性・相対性・多様性の要因として翻訳理論は何を意識化しているか。これについては、言及指示機能中心イデオロギーと言語ナショナリズムイデオロギーが広く見られる反面、社会指標機能、言語変種、社会言語学的多様性、コミュニケーション出来事の固有性／偶発性などが明瞭に意識化された理論化はなされていないのが現状である。（詳しくは、河原、2015を参照。）

## (4) 翻訳理論が負うイデオロギー

翻訳理論のイデオロギーはどのようなものか。そして翻訳研究者のイデオロギーと社会文化史的コンテクストとはどんな関係があるのか。これについては、言説・ジャンルの定

型（メタ語用的フレーム）、つまり「グリッド」が翻訳実践行為に強く関連する（Bassnett & Lefevere, 1998）という主張以外には、行為の出来事性をメタ語用過程の円環と捉える考え方は見られず、標準変種間あるいは標準語間の変換行為としての翻訳という側面を前景化させる傾向が圧倒的に強い。そして、語彙意味論・言及指示機能・標準語に言語の本質を見出すものが圧倒的に多い。このことから、これまでの翻訳理論のほとんどが近代ナショナリズムの性格を鮮明に露呈していると言える。逆に言うと、これら3つに焦点化してきたことで、言語変種に見られる言語の多様性や語用実践行為の社会文化史的多様性などを等閑視してきた面が強い。

したがって、真の意味での「多様性に向けた翻訳論」を展開するには、この言語・語用行為の多次元性・多機能性・多様性を基軸にした翻訳論を展開してゆかなければならない。そして、これは言語記号系に閉じた議論であってはならず、社会文化史的コンテクストとの連動を図りつつ、政治・経済的なグローバルイゼーションなどの動向も対象に世界全体を視野に入れた論を展開しなければならない。（詳しくは、河原、2015を参照。）

## (5) 社会記号論に依拠した翻訳学全体の再構築の方法

本質的に（指標性に関わる）コンテクスト負荷性と（象徴性に関わる）イデオロギー負荷性のある「翻訳等価性」を鍵概念にして、翻訳学の全体をどのように（再）構築していくべきか。

これに関しては、河原（2014）によってこれまでの翻訳諸理論をメタ分析すると、「言語等価論」「社会等価論」「等価誤謬論」「等価超越論」「等価多様性論」の5つに分類できる。また、理論言説の構築という記号過程

を類像性・社会指標性・象徴性の観点から複眼的に眺めると、その結論は次の3つのテーゼに要約できる。(詳しくは、河原、2015を参照。)

- 翻訳とは、当該行為の社会文化史的コンテキスト依存性(社会指標性)および翻訳者のイデオロギーや価値観(象徴性)を不可避的に内包しつつ、ある言語テキストを基に別の言語テキストへと社会的な等価構築を行う、非合目的的效果を伴った行為である。
- (翻訳などの)言語使用を含む記号過程は、①類像作用、②指標作用、③象徴作用が三位一体となって複合的に、対象と記号との間の等価構築、そして両者間の更なる意味構築・意味改変を絶えず繰り返していく過程である。
- (翻訳理論を含む)言語による理論化の過程は、①類像作用、②指標作用、③象徴作用が三位一体となった社会的な指標的類像化、象徴的類像化の複合的な過程であり、類像的な言説の反復使用(詩的機能)により、社会的類像化が更新され強化されるといふ社会的な意味構築と意味改変を繰り返す過程である。

## 7. まとめ

近時、翻訳に関するイデオロギーの研究は徐々に増えつつある(例えば、Pérez, 2003; Cunico & Munday, 2007; Elliot & Boer, 2012)。しかしながら、言語と社会・文化を架橋するメタ理論によって全体の学知という観点からその布置を俯瞰的に分析する視座はなかなか出てこなかった。本稿は、イデオロギーを社会文化史のエピステーメ全体のなかで分析する言語人類学系社会記号論によって、翻訳学説、特にイデオロギー分析を行う翻訳諸学説が負っているイデオロギーについてメタ理

論分析を試みた。

本稿では触れなかったが中立性・客観性を謳う記述的翻訳研究のイデオロギー分析や、本来的に政治的には中立性・客観性が目指されている言語テキスト分析中心の理論群(言語等価論や一部の社会等価論)も、実は本質的にはイデオロギーのディスコースの結果物であるということについての分析も、行わなければならない。詳しくは河原(2015)を参照されたいが、一見イデオロギーとは無縁だと思われる学説群のイデオロギーと、正面からイデオロギー分析を行っている学説群とのイデオロギー的拮抗関係も、メタ理論分析の立場から更に研究をしてゆく必要があり、更には、翻訳学ないし翻訳研究それ自体の帯有する無意識裡の機能(非合目的機能;機能<sub>2</sub>)についても常に自覚的であればならないことを付記しておきたい。

## 註

- 1 本節は河原(2014)による。
- 2 ここでの共同幻想は、マルクス(K. H. Marx)とエンゲルス(F. Engels)による『ドイツ・イデオロギー』(執筆は1845-46年、最初の出版は1926年)が示した幻想としての国家の成立を描いた国家論、あるいはそれを批判的に受容した吉本隆明が主張した『共同幻想論』(吉本, 1982)が想定した国家、ということではない。
- 3 小山(2011)がイデオロギー論の極めて重要な主意を総括しているので紹介しておきたい。

イデオロギー論は、その主な対象を「イデオロギー」として分析するわけだから、対象に対して批判的な、メタ科学的なスタンスを取ることになるのだが、イデオロギー論が批判的なメタ科学であるのは、単に、イデオロギー論がイデオロギーとして同定し分析する「他者」に対して批判的な姿勢を示すから、ではない。たしかにイデオロギー論が、18世紀フランス啓蒙期のイデオロギストたちによって「観念(イデア/イデー/アイデア)の学(オロジー)」として旗揚げされた後[中略],

これら啓蒙思想家たちを「イデオログ」と揶揄したナポレオン・ボナパルトによって「イデオロギー」の語は否定的／卑罵語的に使われだし、この否定的用法（ニュアンス／共示）は19世紀の思想家マルクスによっても継承され、このマルクスのイデオロギー論が、後に、20世紀に入り、マンハイムやフランクフルト学派、アルチュセール、イーグルトン、あるいはアメリカ社会学のマートンなどによって展開されてゆくイデオロギー論の原型となった〔中略〕。だがその基調を成す「他者化」のレトリックイデオロギー論の分析対象を、自分ではなく「他者」として表象するという修辞—は、イデオロギー論にとって本質的なものではなく、イデオロギー—というものが、意識、特に再帰的意識、すなわち、自ら自身の行為／語用実践や、自ら自身が用いている意味範疇、解釈の枠組みについての再帰的意識であるかぎり、そのかぎりにおいて、イデオロギー論は、我々自身の社会文化、その科学、思想、思考についてのメタ科学、自己批判的なメタ科学／メタ思考、すわなち、メタ・レヴェルで生起する批判科学となる—なりうる—のである（小山, 2011, pp. 59-60）。

- 4 「現代社会の不平等な力関係を内包した談話を批判的に分析するという認識のもとで発達してきた一連の談話分析研究」（野呂, 2001, p. 17）であるこの学説群には大きく、イギリス・オーストラリアの批判的言語学（Fowler, Kress, Hodge）・社会記号論（van Leeuwen）・社会文化的変化と談話の変化（Fairclough）、オランダの社会認知的研究（van Dijk）、オーストリアの談話歴史法（Wodak）、ドイツの解釈分析（Maas）・デュースブルク学派（Jäger）、フランスのフランス談話分析（Pêcheux）がある（Fairclough & Wodak, 1997, pp. 262-267; 野呂, 2001）。これらを詳細に見ると温度差があるものの、概して、社会の支配的イデオロギーや不平等を問題化し、それに異議を唱え社会を変革するという分析者の立場および研究の社会的目標を明言するのがこの理論群の特徴である。そして、イデオロギーを、「種々のメディアから入ってくる公的談話から日常交わされる談話まで、誰もが手にする日常的な談話の中に目に見えない‘自然な’

形で埋め込まれた、談話の様々なレベルにおいて発現しうる、かつ、人々に直接的間接的影響を与え得る一定集団の価値観や利害などを正当化するような構造をもったもので、いわば、一定の形や方向性を導き得る発動機付きの思考形態」であるとしている（野呂, 2001, p. 18）。

このようなイデオロギーの定義からもわかるように、もしこれらの学説群をメタ理論として本稿が適用した場合、研究という社会行為の合目的的機能を前景化させ、分析者・研究者が理想とする社会変革を起こすという合目的性に合致した思考の鑄型に嵌めて既存の諸学説を分析・解釈することになるため、歪曲化を伴ったイデオロギッシュな全体像を描くことになる。したがって、本稿が目指すメタ理論には適しないと判断される。

- 5 社会にはさまざまな役割類型が多く存在し、その強弱や射程にも温度差があるとすれば、同一人に課される役割も同時に複数存在することになる（多元的役割演技者）。そうなる役割規範が複数あると想定される場面も発生するが、相対的に安定した社会システムにおいてさえ、役割期待の間の齟齬は単なる偶然や個人の特異性だけに起因するのではなく、逸脱行為それ自体を正当化する個別の価値基準の設定というレベルでも規範が複数存在することとなる。これらの役割期待に葛藤が見られる場合、それぞれの役割期待とサンクションの齟齬はますます激しく現れる。したがって、規範の複数定立化、イデオロギーの対立化はこの齟齬の正当化を反映したものである（ネーデル, 1978[1957], p. 243）。役割葛藤が社会構造に起因するものである一方、役割のズレは個人に起因する役割現象である。適応能力の不足、役割についての知識のずれ・ゆがみ・偏見、規範意識の逸脱などが原因となる。他方、役割から距離を取ることで、自分らしさ、自己のアイデンティティを形成する現象も見られる。これをゴッフマンは役割距離と呼んで、個人とその個人が担っていると想定される役割との間の「効果的に」表現されている鋭い乖離と定義している（ゴッフマン, 1985[1961]）。
- 6 例えば敬語や女言葉・男言葉のようレジスターは意識に上りやすいが（ラボヴ派の社会言語学的ステレオタイプなど参照。レジスター＝

ステレオタイプ), それに対して, マーカーや特にインディケータは意識に上りにくい (小山, 2011, pp. 188-195)。

- 7 言及指示機能の方が社会指標機能よりも意識化されやすいという点に関して, 例えば, グライスの推意などは, 「言われたこと」(言及指示機能)を前提とし, そこから「(為されるように)意図されたこと」(社会指標機能の一部)へと向かうという理論構成を採る。つまり, 「言われたこと」(言及指示機能)がまず意識化され, それに基づき「意図されたこと」が計算される。同様に, 発話行為に関しても, 「言われたこと」が基底にあり, 「為されていること」とそれとの関係が直接的か間接的かで, 直接的発話行為(これが原型), 間接的発話行為(派生形)などが措定されている。このように, 言及指示機能のほうが社会指標機能よりも意識化されやすいことが示されている (Koyama, 1997)。
- 8 翻訳者は社会的な主体, 経済的主体, 文化的創造者, そして言語産出者という多岐にわたるものとして見ることができる (Mossop, 2007, p. 36 in Munday, 2007)。
- 9 すべての翻訳にはその基底に政治的な側面がある。一回一回の翻訳行為は複数の言語や複数の文化の間に(平等または不平等な)権力関係を築いてしまうからである。[中略] 翻訳はメタ言語的, メタ文化的活動であって, 翻訳以外の執筆形態であれば日常生活に埋没し陰を潜めているような複数の言語的な価値や権力のモデル, 言説のモードの間の対照や対立を顕在化させてしまう (Jaffe, 1999)。
- 10 Simon (1996) は言う。「本書の目的は2つあり, 一つは翻訳研究にジェンダー問題の最も大きな網を投げかけること, そして, ジェンダーを通じて翻訳研究をカルチュラル・スタディーズの枠組みに近づけること」(p. ix)。このようなジェンダー研究系の論陣に通底する基調トーンはアイデンティティ・ポリティックスである (p. vii)。したがって, 翻訳を文学との関わりの一形態, 文学的行動主義・現状改革主義 (literary activism) として捉えるのであり (p. viii), 「翻訳は必然的に『欠陥を孕んでいる』のであるから, あらゆる翻訳は『女性と評される』のである」などと言う (p. 1)。

これは自ずと, 翻訳ないし翻訳理論に対する

立ち位置 (positioning) も決定するのであり, 社会改革の一環として「介入的姿勢」(cf. Munday, 2007)を採り, 翻訳の実践を通して男性優位の言説である起点テキストに対し, あらゆる訳出戦略を使ってその歪みを是正し, 女性の存在 (女性性) が目に見える形の目標テキストを産出するのである (translatorではなく, “translator”であるという主張などはその一環)。その後, 同様のトーンの研究も次々と登場した (例えば, Simon & St-Pierre, 2000; Santaemilia, 2005; von Flotow, 2011)。

## 参考文献

- Baker, M. (2005). Narratives in and of translation. *SKASE Journal of translation and interpretation*, 1(1), 4-13.
- Baker, M. (2006). *Translation and conflict: A narrative account*. London & New York: Routledge.
- Baker, M. (2011). *In other words*. London & New York: Routledge.
- Bassnett, S. & Lefevere, A. (Eds.), (1998). *Constructing cultures: Essays on literary translation*. Clevedon: Multilingual Matters.
- バーバ, H. (2005). 『文化の場所—ポストコロニアリズムの位相』(本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美・訳). 法政大学出版局. [原著: Bhabha, H. K. (1994). *The location of culture*. London & New York: Routledge].
- ブラウンリー, S. (2013). 「Descriptive vs. committed approaches 記述的アプローチと関与的アプローチ」ペイカー, M・サルダーニャ, G. 『翻訳研究のキーワード』(藤濤文子・監修・編訳). (45-52頁). 研究社. [原著: Baker, M. & Saldanha, G. (2009). *Routledge Encyclopedia of translation studies*. London & New York: Routledge].
- Cunico, S. & Munday, J. (Eds.), (2007). Translation and ideology: Encounters and clashes. *Special issue of The Translator*, 13(2), Manchester: St Jerome.
- イーグルトン, T. (1999). 『イデオロギーとは何か』(大橋洋一・訳). 平凡社. [原著: Eagleton, T. (1991). *Ideology: An introduction*. London & New York: Verso].
- Elliot, S. S. & Boer, R. (Eds.), (2012). *Ideology, culture,*



- and translation. Atlanta: Society of Biblical Literature.
- Fairclough, N. & Wodak, R. (1997). Critical discourse analysis. In T. A. van Dijk (Ed.), (1997). *Discourse as social interaction* (pp. 258-284). London & Thousand Oaks: Sage.
- フォーセット, P.・マンデイ, J. (2013). 「Ideology イデオロギー」 ベイカー, M・サルダーニャ, G. 『翻訳研究のキーワード』 (藤濤文子・監修・編訳). (107-114頁). 研究社. [原著: Baker, M. & Saldanha, G. (2009). *Routledge Encyclopedia of translation studies*. London & New York: Routledge].
- Fisher, W. R. (1987). *Human communications as narration: Toward a philosophy of reason, value, and action*. Columbia: University of South Carolina Press.
- ゴッフマン, E. (1985). 『出会い—相互行為の社会学』 (佐藤毅・折橋徹彦・訳). 誠信書房. [原著: Goffman, E. (1961). *Two studies in the sociology of interaction*. New York: The Bobbs-Merrill Company, Inc].
- Hatim, B. & Mason, I. (1997). *The translator as communicator*. London & New York: Routledge.
- イングレリ, M. (2013). 「Ethics 翻訳倫理」 ベイカー, M. サルダーニャ, G. 翻訳研究のキーワード』 (藤濤文子・監修・編訳). (62-70頁). 研究社. [原著: Baker, M. & Saldanha, G. (2009). *Routledge Encyclopedia of translation studies*. London & New York: Routledge].
- Jaffe, A. (1999). Locating power: Corsican translators and their critics. In J. Blommaert (Ed.), *Language ideological debates* (pp. 39-66). Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- Jakobson, R. (1959). On linguistic aspects of translation. In Venuti, L. (Ed.), (2004). *The translation studies reader*. 2nd edition (pp. 138-143). London & New York: Routledge.
- 河原清志 (2011). 「翻訳語のカセット効果論: 無限更新の意味生成の営み」 青山学院大学英文学会 (編) 『青山学院大学英文学思潮』 第84巻, 69-88頁.
- 河原清志 (2014). 「翻訳等価論の潮流と構築論からの批評」 日本通訳翻訳学会・翻訳研究育成プロジェクト (編) 『翻訳研究への招待』 第11号, 9-33頁.
- 河原清志 (2015). 「翻訳等価性再考—社会記号論による翻訳学のメタ理論研究」 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科提出博士論文.
- Koyama, W. (1997). Decemanticizing pragmatics. *Journal of pragmatics*, 28, 1-28.
- 小山亘 (2008). 『記号の系譜: 社会記号論系言語人類学の射程』 三元社.
- 小山亘 (2009). 『記号の思想』 三元社.
- 小山亘 (2011). 『近代言語イデオロギー論』 三元社.
- Lefevere, A. (1992). *Translation, rewriting and the manipulation of literary frame*. London & New York: Routledge.
- Lefevere, A. (1998). Translation practice(s) and the circulation of cultural capital. Some Aeneids in English. In S. Bassnett & A. Lefevere (Eds.), *Constructing cultures: Essays on literary translation* (pp. 41-56). Clevedon: Multilingual Matters.
- 真島一郎 (編) (2005). 『だれが世界を翻訳するのか: アジア・アフリカの未来から』 人文書院.
- Mossop, B. (2007). The translator's intervention through voice selection. In Munday, J. (Ed.), *Continuum studies in translation: Translation as intervention* (pp. 18-37). London & New York: Continuum International Publishing Group.
- Munday, J. (Ed.), (2007). *Translation as intervention*. London & New York: Continuum International Publishing Group.
- マンデイ, J. (2009). 『翻訳学入門』 (鳥飼玖美子・監訳). みすず書房. [原著: Munday, J. (2008/2012). *Introducing translation studies*. London & New York: Routledge].
- ネーデル, S. F. (1978). 『社会構造の理論—役割理論の展開—』 (齊藤吉雄・訳). 恒星社厚生閣 [原著: Nadel, S. F. (1957). *The theory of social structure*. London: Cohen & West.].
- 野呂香代子 (2001). 「クリティカル・ディスコース・アナリシス」 野呂香代子・山下仁 (編著) 『「正しさ」への問い 批判的社会言語学への試み』 (13-49頁). 三元社.
- Pérez, M. C. (2003). (Ed.), *Apropos of ideology: Translation studies on ideology—Ideologies in translation studies*. Manchester: St. Jerome Publishing.

- サルダニヤ, G. (2013). 「Linguistic approaches 言語学的アプローチ」 ベイカー, M.・サルダニヤ, G. 『翻訳研究のキーワード』 (藤濤文子・監修・編訳). (115-123頁). 研究社. [原著: Baker, M. & Saldanha, G. (2009). *Routledge Encyclopedia of translation studies*. London & New York: Routledge].
- Santaemilia, J. (Ed.), (2005). *Gender, sex and translation: The manipulation of identities*. Manchester: St Jerome.
- Silverstein, M. (1976). Shifters, linguistic categories, and cultural description. In K. H. Basso, & H. A. Selby (Eds.), *Meaning in anthropology* (pp. 11-55). Albuquerque, NM: University of New Mexico Press.
- Simon, S. (1996). *Gender in translation: Cultural identity and the politics of transmission*. London & New York: Routledge.
- Simon, S. (2002). Germaine de Staël and Gayatri Spivak: Culture brokers. In M. Tymoczko and E. Gentzler (Eds.), (2002). (pp. 122-140).
- Simon, S. & St-Pierre, P. (Eds.), (2000). *Changing the terms: Translating in the postcolonial era*. Ottawa: University of Ottawa Press.
- Tymoczko, M. (1999). *Translation in a postcolonial context: Early Irish literature in English translation*. Manchester: St Jerome.
- Tymoczko, M. (2000). Translation and political engagement: Activism, social change and the role of translation in geopolitical shifts. *The translator*, 6(1), 23-47.
- Tymoczko, M. (2003). Ideology and the position of the translator: In what sense is a translator “In-between”? In M. C. Pérez (Ed.), *Apropos of ideology: Translation studies on ideology—Ideologies in translation studies* (pp. 181-201). Manchester: St Jerome.
- Tymoczko, M. & Gentzler, E. (Eds.), (2002). *Translation and power*. Amherst & Boston: University of Massachusetts Press.
- von Flotow, L. (Ed.), (2011). *Translating women*. Ottawa: University of Ottawa Press.
- 吉本隆明 (1982). 『共同幻想論』角川書店.